

## 福祉系大学生におけるレクリエーション参加状況と 性行動との関係について

波多野 義郎 \*松田 智香子

Relationship between actual participation in recreational activities and sexual behaviors among the students at a welfare oriented university

Yoshiro HATANO \*Chikako MATSUDA

### Abstract

The purpose of this study is to clarify the relationship between actual participation in recreational activities and sexual behaviors among the students at a welfare oriented university. For this purpose, a questionnaire survey on the respective areas was developed and administered to 74 male and female students who took a recreation course at the Kyushu University of Health and Welfare in the year 2002. From the results, certain tendencies pertaining to the relationship between recreational activity participation and sexual behaviors among the current students were pointed out.

Key words: recreational activity, sexual behavior, college students

キーワード: レクリエーション, 性行動, 大学生

### 1. 緒言

人類の文化向上の営みは豊かに実り、世界的な拡がり  
で着実に飢餓・疾病・戦火から脱出してきた。それにより、  
平均寿命延伸の傾向が著しく、例えば2000年における日  
本人では男性77.64歳、女性84.62歳に達している。こ  
うして高齢化が進み、65歳以上人口が総人口に占める割合  
は1998年で16.2%に増加した。この比率が14%を越した場  
合を高齡社会とする国連定義を持ち出すまでもなく、日  
本が間違いなく高齡社会を形成するに至ったことを示し  
ている。

高齢者の増加は一つの現象であるが、社会の近代化に  
伴って成熟社会が成立すると、労働時間が短縮されて余  
暇(自由)時間が増加する傾向が強まる。それにより人生

の中において自由時間活動が持つ比重が増加する。人々  
はもはや「食う(働く)ために生きる」のではなくて「遊ぶ  
(自由時間活動の)ために生きる」という生き方を選ぶ時  
代に入っていると考えられる。高齢者は高齢者なりに、  
若者は若者なりに、どのように自由時間活動を楽しみ、  
それによって自分なりの自己実現を図りつつ充実した人  
生を営むかが問われる時代なのである。<sup>1)</sup>

現代はもう一方で自由が溢れる時代である。増えた自  
由時間をどのように過ごすかも自由であるが、自由を自  
分なりにコントロールし切れない時には、自ら傷つくこ  
とがあるのも事実である。例えば性行動に関わる自由度  
の増大は、現代人に古い時代からの性のタブーからの解  
放をもたらした一方で、望まれない妊娠や性感染症の拡

大、家庭への求心力低下というような事態を招いてもいる。<sup>2)</sup>

性行動は必ずしもレクリエーションの対象ではないが、健全で充実した性行動は自己実現につながるという意味で、両者はある種の関係性を持っていると言える。本研究はレクリエーション活動が充実した人生を構築する上に有用であるということ、健全で充実した性行動は性の健康(sexual health)の要件であり、それは「性に関わる人権」の一角を占める<sup>3)</sup>ということと同じ視野の中に入れて、その関連性を確かめようとする試みである。具体的には、現代人が自由時間活動や性行動の自由を入手している中で、それは真に彼らの自己実現につながり得るのか、性行動上の自由はどこまで許容され得るのか、というような命題に対して、特に大学生を対象にして何らかの資料を得ようとするものである。

九州保健福祉大学では、福祉に関わる人材の養成を目指してレクリエーション関連の授業をカリキュラムに含めている。また中でも東洋介護福祉学科のカリキュラムの中には、人間理解を深めるために「性と人間」の講義を開講している。レクリエーション活動と性行動という2つの領域を組み合わせる本研究は、このような関連の中で発想され、実施されたものである。

## 2. 先行研究

レクリエーション活動の実態調査リストについては既に筆者らが提案しており、レクリエーション関連授業を受講する大学生集団を対象とした実際の調査結果とともに報告したところである。<sup>7)</sup>それによると、彼らは受講特性からして当然ではあるが基本的にレクリエーション志向であり、他に雑誌、CD音楽、テレビ、映画・ビデオ、ドライブ、カラオケ・パチンコ、旅行などを主たるアクセスとしてレクリエーション的活動を楽しんでいる。また性行動に関する質問項目として「異性との交際により心が晴れ晴れし生甲斐を感じる(以後「異性交際生甲斐」とする)」「心が晴れ晴れし生甲斐を感じるような異性との交際があった(以後「生甲斐交際実体験」とする)」の2項目が含まれていた。実際の回答率ではそれぞれが81, 63%と比較的高い該当率を示した。この高該当率そのものは「性の健康」という概念の立場からすればむしろ喜ぶべき現象と言える。

性行動の実態調査については、(財)日本性教育協会が定期的に行ってきた日本人青少年の性行動調査<sup>4)</sup>の内容を筆者なりに応用・発展させた、大学生対象の性行動調査の結果を既に発表してある。<sup>5, 6)</sup>

現代日本人青少年における性行動は思春期後半におい

て早熟化傾向を示している。しかしそのことは必ずしも重要ではなく、例えば性交後にその行動によって相手とどのような関係が起こったか(実際には男性の30%、女性の45%が「相手をもっと好きに」と回答)は注目すべきものであった。一方、「初交時避妊についての会話あり」の該当率が男性33%、女性62%であったこと、不特定相手の性交経験率が(性交経験者の)男性で42%に上がっていることなどは、容認すべきか、対抗策が必要なのかなどを巡って議論があると思われる結果であった。<sup>5)</sup>

## 3. 方法および結果

九州保健福祉大学社会福祉学部において、2002年度に授業科目「福祉レクリエーション」を受講する学生(社会福祉計画学科、臨床福祉学科)72名(男子38名、女子34名)を対象にして質問紙調査を行った。その結果を統計処理し、必要に応じて図表化する中で、「異性交際生甲斐」/生甲斐なし、「生甲斐交際実体験」/実体験なし、「レクリエーション行動活発群」/非活発群、QOLチェックリストにおける「生甲斐群」/生甲斐低群、ADLによる「体力あり群」/体力なし群と言うようなそれぞれの分割法による各2群間における性行動上の差異などを探った。

まず性行動に関する各種の質問についての統計処理結果を要約して表1に示す。次に男子における精通・デート・初交、そして女子における初経・デート・初交の各経験年齢分布図(M, max. min値に基く正規分布)を図1, 2に示す。

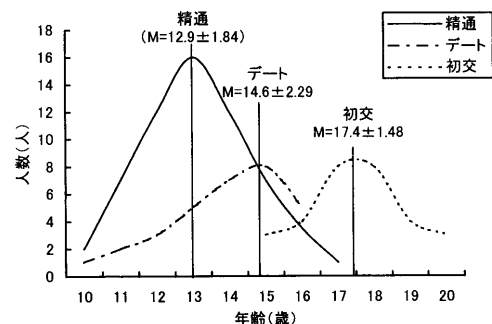


図1 男子学生における精通・デート・初交年齢 <N=37>

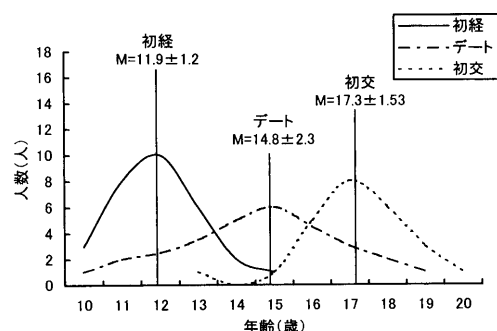


図2 女子学生における初経・デート・初交年齢 <N=34>

## 3.1. 性意識調査の結果について

本調査に含まれた性意識調査の結果について以下に考察することにする。

思春期到来前後で最も多情多感だった中学1年生の頃の自分を想起しての回答では、父母との関係について、かなり積極的な態度が見られたと言える。つまり「父と母が愛し合っていたと思う」と断言できる者がかなりおり、その上両親と信頼関係があったと答えた者は更に多かった。一方「心に一抹の寂しさを覚えた」と答えた者の数もかなりいた。しかしそのような家庭でのある種の不安げな親子間関係を遙かに上回って心強く思われるのが「信頼できる友人の存在」であった。

先行研究によると、家庭での自由度が大きい場合には性行動上の自由性が大きいと言う。<sup>4)</sup> また精神的・社会的な不安定感はいさばしば性行動上のアクティビティを高めると言う説もある。<sup>10)</sup> そこで上記の中学1年生時代を想

起しての質問となったわけである。結果は明確ではないが、家庭や父母に対する信頼感は少なくはないのであるが、現代青少年には多少の「心寂しさ」があるように思われる。一方、信頼できる友人の存在が示唆され、これが現代青少年の支えになっていることを再確認して、教育の場においても互いの支え合いを促進するように努めるのは良いことと思われる。前回調査と比較してみると家族への信頼感はより強かったが、それでも思春期にある種の寂しさが存在するのは否定できない。その中で友人との交流が救いになっているという示唆は前回調査結果<sup>7)</sup>と同じ流れであった。

「異性に性的魅力を感じるころ」として男女とも「人柄」「優しさ」が上位を占めた。人柄、優しさが上位にランクされていることで大学生の判断が「人間性中心」にあることが示唆され、共感を得やすいと思われる。「初めて憧れた異性」で圧倒的の第1位が級友であったことは、

表1 性意識・性行動とレクリエーション意識に関する調査結果

	男子		女子	
	M	n	M	n
スパートの年齢	6.57~7.4年生 (12.57~13.4歳)	36	5.32~6.65年生 (11.32~12.65歳)	32
精通・初経年齢	12.9歳	37	11.9歳	32
(中1の時) 父母は相愛	+0.44 (+1.0~-1.0の幅)	39	+0.76	34
(中1の時) 両親との信頼関係	+0.9	39	+0.6	34
(中1の時) 寂しかった	-0.32 (少し寂しい)	39	-0.2	34
(中1の時) 信頼友人がいた	+0.87	39	+0.83	34
初回憧れの異性	級友：69%	39	級友：56%	34
異性の魅力	優しさ：23%	39	人柄：29%	32
自分の魅力	人柄：41%	39	人柄：38%	30
初デート時年齢	14.6歳	35	14.8歳	27
相手の年齢	+0.03歳	31	+0.48歳	27
初キス時年齢	14.9歳	33	15.2歳	24
初交時年齢	17.4歳	29	17.3歳	20
初交までの期間	210日	27	145日	18
相手の年齢	+0.32歳	25	+0.63歳	19
初交時避妊会話	53%	15	63%	19
	コンドームつけよう	10	コンドームつけてね	4
相手との関係	もっと好きに：30%	27	関係深まった：55%	20
現在固定・定期的性交	32% 2.8回/wk	25	39% 1.3回/wk	18
累積性交相手数	1.9人	28	2.1人	20
不特定相手性交	0	26	4件：21%	19
将来結婚願望	92%	39	79%	34
結婚希望年齢	26.6歳	37	25.0歳	25
相手希望年齢	-0.5歳	32	+1.6歳	22
非婚でも異性関係大切	82%	33	70%	30
希望出生数	2.2人	38	2.1人	33
晩婚・非婚	本人の自由：74%	38	本人の自由：79%	33
少子化	兄弟望ましい：74%	38	兄弟望ましい：76%	34
愛とは	理解・思いやり：37%	38	理解・思いやり：32%	33
異性交際生甲斐	87%	38	72%	32
生甲斐異性あり	59%	39	50%	34

先行研究<sup>9)</sup>と同じであった。「異性から自分の魅力として感じて欲しい部分」として第1位に人柄, 第2位に優しさであった。ともに人間的な要素であってむしろ妥当な回答内容と思われた。

### 3.2. 精通・デート・初交の年齢等について

この項ではまず男子学生における精通・デート・初交の各経験年齢の分布について考察し, 更に女子の初経, 性交に関わるいろいろな情報について議論することにする。まず精通(M=12.9歳)であるが, 日本人青少年に関する最近の調査<sup>4, 8)</sup>では50パーセントの者が精通を迎えるのが12歳<sup>8)</sup>又は13歳<sup>4)</sup>と言う報告であったし, 先行研究でも12.7歳であったから, 本調査結果は整合性があると言える。初経発来は11.9歳であるがこの数値は1974年の全国調査<sup>4)</sup>以来全く変動がなく, 上述の精通年齢の安定状態と併せて, 「いわゆる生物学的早熟化はひとまず飽和状態に達したままである」との説の根拠となっている程である。<sup>6)</sup>

次に初デート(M<sub>男</sub>=14.6歳, M<sub>女</sub>=14.8歳)であるが, 17歳<sup>4)</sup>, 15.1歳<sup>9)</sup>の何れよりも大きく前傾化している点が注目される。また初キス時年齢の14.9(男子)及び15.2(女子)歳は東京学芸大学調査(15.1歳及び16.4歳)<sup>9)</sup>〈但し経験者のみの統計〉, 1999年青少年調査(18歳及び18歳)<sup>4)</sup>を大きく下回り, 大学生グループの方が全国調査よりも行動が早熟化しているような印象を受ける。同様にして初交年齢(17.4歳及び17.3歳〈経験者のみの統計〉)は先行研究<sup>5)</sup>とほぼ同様の結果である。

性のパートナーと出会ってから初交に至るまでに経過した日数は210日及び145日で, 1年以上の時間経過を要した先行研究<sup>5)</sup>成績に比べると途中の人間関係の緊密化プロセスがかなり簡略化された感じを受け, それだけ安易な性行動であると想像される。また相手(パートナー)との年齢差も男女ともに短縮され, いわゆる初交時は年長者にリードされる形の交際形態から, 両者対等の積極的交際形態に一步近づいた感じを受ける。

初交後に相手との関係がどのように変化したかは, その行動が両者をより緊密に結合する機能を持ったかどうかを判断する材料になると言える。本調査では「もっと好きに」「関係は深まった」等の積極的な評価が多かった。

初交時に避妊についての会話を交わしたかどうかは, その行動において相手や両者の将来の幸せに対する配慮の様子を示す指標としての意味があるとされる。<sup>10)</sup>本調査では53%及び63%で評価は「どちらとも言えない」と言う印象である。会話と言っても「コンドームつけてね」「ゴムつけるよ」と言った内容が大部分であった(表2)。全

国調査(1993年)では77%及び79%が「避妊を実行」としており,<sup>4)</sup>この面では物足りない成績である。

また過去の性交相手合計人数が異常に多いのは性交が「消費的快楽中心の道具」化しているとされるが, 本調査では1.9人及び2.1人, 先行研究では2.8人及び2.4人, 東京学芸大学調査では1.7人及び2.3人, 全国調査(1993年)では2.9人及び2.0人なのでこの面では全国の風潮と大差ないと言ってよい。以上の数値は何れも比較上の議論であって, 例えば累積性交相手数1.9人以上と言うことを容認すべきかどうかには議論があろう。不特定の異性(名前や所属を知らない)との性交は, 男子でゼロ回答であったのに対して女子は4件(性交経験者の21%)に上った。

今日の青少年や大学生の性行動について, これを軽率だと非難するだけでは世代間断絶が深まるばかりで建設的とは言い難い。しかし百歩譲って彼らの婚前性交を受け入れるためには, 性交時に相手の意志や将来の福祉に配慮する態度が要求されよう。そして「望まれない妊娠」「性感染症」を招くような軽率な行動を避けるような教育や世論形成が強調されるべきと考えるものである。

「愛があれば性交が許される」と言った時の「愛とは」に対する回答が男女とも第1位で理解・思いやりであった。相手を大切に思い, 大切に振る舞うと言う気持ちが込められていた。

表にはその他の調査項目も含まれるが, 総じて今回の調査対象者たちは結婚願望が比較的強いなど, 男女交際に対して積極的な態度を持っていた。同様にして子育て希望もあったが, 晩婚化・非婚化の風潮については圧倒的に本人の自由であるとの意見が強かった。

表2 初交時避妊についての会話

避妊具を既に購入していた(女, 相手)
お互い真剣なら当然(女)
コンドームつけよう(男, 自分)
コンドームと生理の話(男, 両方)
ちゃんとつけるからね(女, 相手)
コンドームをつける(男, 自分)
コンドームをつけよう, ウン(男, 自分)
つけようか(男, 自分)
ちゃんとつけてね(男, 相手)
コンドームつけた?(男, 相手)
ゴムつけて(女, 自分)
自分から避妊具を装着, 相手も同意(男)
つける?(男, 自分)
基礎体温チェック(女自分)相手コンドーム
ゴムしよう(男, 自分)
ゴムするか?そうね(男)
ちゃんとゴムつけてね, 分かった(女)

一般的にこの項目で議論した性行動に関しては、本調査の対象グループは早熟化しているとは言え、その内容が不健全なのではなく、性行動の自由化が若年時から進み、青少年が試行錯誤しつつ自立の道を探っているという感じを受ける。先行研究<sup>5)</sup>とほぼ同様の傾向であって、福祉系大学生であるとしても人間の性を正面から見据えて受け止めている雰囲気は伺われる。生物学上の早熟化は停滞状態にあるが、大学生を含めて青少年の個人の行動に関する社会的規範が文字通り自由化されている現代では行動上の早熟化は進行しており、その流れは止まるとは思われない。その中であって性行動が単に自分の利益のためばかりでなく、相手の幸せのための人間関係を支える愛の行動となるべきことが、福祉系大学生に充分理解されるようになることは望ましいと言えよう。

### 3.3. レクリエーション参加状況とのクロス分析について

本研究ではレクリエーション行動、QOL、体力等の質問項目における回答状況を軸にして性行動の特性が現れるかどうかについてクロス集計を行って検討した。

「異性との交際により心が晴れ晴れするし、生き甲斐を感じる(異性交際生甲斐、一般印象)」と答えた者(34名中68%)とこれに該当しなかった者、「生き甲斐を感じる異性交際が過去1カ月にあった(生甲斐異性あり具体体験)」のあった者とこれに該当しなかった者、レクリエーション行動50項目についての肯定率が高い者(40項目以上)と低い者(39項目以下)、QOLに関する自己評価得点(10項目10点)が高い者(8点以上)と低い者(7点以下)、体力に関する自己評価得点(10項目10点)が高い者(8点以上)と低い者(7点以下)のそれぞれについて、回答傾向がある程度の対比を示している項目について表3に掲げた。対比するグループ分けの結果、両者間の差が有意水準(危険率 $l_s$ , level of significance $<.01$  又は $l_s.<.05$ )に達した例はそれほど多く

表3 レクリエーション行動内容、QOL自己評価、体力自己評価を軸にしたクロス集計結果において有意差に近い対比を示した組み合わせ項目(N男=40, N女=34)

異性交際で生甲斐感じる/感じない(一般印象)		危険率
女子(N=34)	スパートが早熟タイプ	.097
	初交への経過時間	.1/44年
	初交相手年齢差小	.38/2.0
	将来結婚希望大	.03
	子ども希望人数	2.3/1.6
男子(N=40)	生甲斐感じる異性交際あり	.1
	レク50項目得点	38/21
	初交相手年齢差	.36/0
	性交経験人数	1.78/4.3
	性行動必要	93/57%
生甲斐感じる異性交際が過去1カ月にあった(具体体験)/なかった		
女子(N=34)	QOL合計点	7.7/6.8
	初交への経過時間	.16/49 (年)
	将来結婚希望大	.17
男子(N=40)	異性交際で生甲斐感じる	.1
	レク50項目得点	37/32
	将来結婚希望大	.08
レクリエーション行動高得点(40/50以上)/低得点		
女子(N=34)	QOL自己評価高得点	7/8.1
	異性交際で生甲斐感じる	.001
	将来結婚希望大	.19
	結婚希望年齢	24.4/27 (歳)
	子ども出生希望数	2.0/2.5
男子(N=40)	QOL自己評価高得点	7.6/6.6
	体力自己評価高得点	8.6/7.9
	精通年齢早い	12.4/13.3
	初デート年齢	13.8/15.3 (歳)
	将来結婚希望大	.08
QOL自己評価高得点(8/10以上)/低得点		
女子(N=34)	生甲斐感じる異性交際ない	1.4/1.6
	初交年齢高い	17.9/16.4
	将来結婚希望小	.15
男子(N=40)	初交年齢遅い	18.1/17.0
	将来結婚希望大	.08
体力自己評価高得点(8/10以上)/低得点		
女性(N=34)	スパート早熟	6.2/7.2 (年生)
	性交相手人数少ない	1.6/2.8
	将来結婚希望大	.08
男性(N=40)	レクリエーション行動	36/31
	初交相手年齢上	+47/-2 (歳)
	性行動必要度小	.02

はなかったもので、表にはそれより甘い水準( $l_s.<.20$ )の項目も含めてある。

以下に表の成績をかいつまんで検討することにする。異性交際で生き甲斐感(一般印象)を感じるグループ(男

女)と、生き甲斐異性あり(具体体験)グループの2群では、反対(感じない、体験しなかった)グループに比べて異性願望度(将来の結婚希望度が大きいなど)が高く、特に女性では性行動が活発な傾向が伺われた。一方、男性ではレクリエーション活動が活発な傾向がみられた。女性では性行動と生き甲斐とが密接に連動し、男性では人生に潤いを与えるレクリエーション活動と性行動による生き甲斐とが同系列上に置かれている可能性が示唆された。

レクリエーション行動、QOL自己評価得点、体力自己評価得点は互いに緩やかな連携傾向を示し、それぞれの行動が生活のポジティブな側面に結びついていることを示唆した。しかしこれらは必ずしも性行動を触発する傾向を示さず、むしろそれを遅延させる傾向が示唆された。

以上の結果を考慮に入れて以下の考察が可能と思われる。女性では異性交際により生き甲斐が触発されると、その結果として性行動が活発化する。男性では性行動はレクリエーション的感覚と交錯している面がある。各人の生活の内面的充実度に関係すると思われるレクリエーション活動、QOL得点、体力得点等は互いに関連し合っているが、それらが充実していると性行動はむしろ遅延化することが示唆された。

#### 4. 結 語

九州保健福祉大学社会福祉学部の学生72名(男子38名、女子34名)を対象にして質問紙調査を行い、その結果を統計処理し必要に応じて図表化した。その中で、「異性交際生甲斐」/生甲斐なし、「生甲斐交際実体験」/実体験なし、「レクリエーション行動活発群」/非活発群、QOLチェックリストにおける「生甲斐群」/生甲斐低群、ADLによる「体力あり群」/体力なし群と言うようなそれぞれの分割法による各2群間における性行動上の差異などを探った。

今回の性意識・性行動調査では、先行研究に比べて現代大学生の意識・行動が、前回と同程度のレベルにあるか、また項目によっては(特に女子において)更に前傾化している傾向が示唆された。一方、レクリエーション活動、QOL、体力などが互いに関連しながら各人の生活を充実させていることが示され、またそれらが充実していると性行動が遅延化することが示唆された。また性行動が「生き甲斐感」をもたらし、生活の充実感を支えていることも示唆された。

そう考えると性行動の前傾化現象はレクリエーション活動、QOL、体力などが軽視されてきている世情の反映である可能性がある。そして大学生を含む思春期後期の

青少年における性行動が早熟化の道をたどるのは、「生き甲斐」を見失いがちな彼らが自己実現を求める行動の表れである可能性もある。またレクリエーション活動、QOLや体力をもっと直視するライフスタイルが浸透すれば性行動早熟化は止まるかも知れないと推論することも唐突ではないと言えよう。

#### 引用参考文献

- 1) 財余暇開発センター：レジャー白書'99.同財団刊,1999.
- 2) Hatano, Yoshiro: Sexuality Education in Asia-Japan. *Journal of Asian Sexology*, 1:7-12, 1998.
- 3) 13th World Congress of Sexology: Valencia declaration on sexual rights. In Borrás-Valls, Juan J. and Maria Perez-Conchillo: *Sexuality and human rights*, 1998. p.17.
- 4) 財日本性教育協会：青少年の性行動：わが国の中学生・高校生・大学生に関する第1, 2, 3, 4, 5回調査報告。財日本性教育協会, 1974, 1982, 1988, 1994, 2000.
- 5) 波多野義郎・松田智香子：福祉系大学学生における性意識・性行動について。九州保健福祉大学研究紀要, 2:35-42, 2001.
- 6) 波多野義郎：現代の青少年はどれだけ早熟化したか。青少年研究, 1:53-58, 2001.
- 7) 波多野義郎・松田智香子：福祉系大学学生におけるレクリエーション活動とQOL、体力自己評価の現状。九州保健福祉大学研究紀要, 3:101-106, 2002.
- 8) 東京都小・中・高校生教育研究会編：児童・生徒の性。学校図書, 1993, 1996.
- 9) Hatano, Yoshiro: Sexual behavior development and attitude of the Japanese youth. *Sexuality and human rights, Proceedings of the 13th World Congress of Sexology*, 1998. pp.275-278.
- 10) L.A.カーケンダール(黒田芳夫・波多野義郎 共訳編) 家族関係の性教育—愛の理解。ぎょうせい, 1977.